

# 緑ネット通信 No.82

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆  
 年会費：1000円  
 口座番号：00170-9-696174  
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

創造・想像を育む森の自然に魅せられて

## 「自然は学びの宝庫」

NPO法人子どもっとまつど

加賀 まゆみ

NPO法人子どもっとまつどでは長年(旧松戸子ども劇場時代含む)にわたり、子どもたちが豊かな文化環境の中で「子どもの時間」を過ごすために、子ども時代にこそ大切な「鑑賞体験」、「障がい者との交流体験」、「自然体験やものづくり体験」の様々な機会を通して、たくさんの「ワクワク・ドキドキ」に出会えることを願って、いろいろな人や団体と連携して活動を行ってきました。



その中でも、子どもにとって自然体験は欠かせない大切なものです。近年、子どもたちはバーチャル空間の中に身を置き、そしてまた、その親世代も子どもと同様に自然にふれる機会がないということを実感しています。

松戸のように農地や樹林地の宅地化が進んでいると、身近な自然を見つけることが難しくなりつつあります。

そんな人口密集地である松戸にも、里やまや樹林地が所々に点在しています。子どもっとまつどでは10年程前から、まつど里やま応援団の協力を得て、里やまで親子の自然体験活動を行っています。この活動のなかで、工



作、観察、収穫、虫探し、森あそび等々の体験を通して、五感を磨くこと、創造性・想像性を育むこと、多様な人々と関わることで様々な「何か」を得ることができるよう活動をしています。そして、これらの森での自然体験活動は、普段の生活の中では経験できない貴重な学びの場となっています。

しかし、年数回のしかも限られた人数での体験では十分とは言えません。そして、子どもたちがあそぶことのできる里やまや雑木林には、いつでもどこでも自由に入ることにはできません。もっと多くの子どもたちが自然の中であそぶことができる場があっ



たらいいなと「あそびの森 in 囲いやま」や「ぷらっと子どもの森」を里やま応援団をはじめ、他団体とともに協働して作ることができました。

近年、土地開発により樹木伐採で失われつつある雑木林。一度失われた森林を再生するにはとてつもない長い年月がかかります。子どもたちとともに身近な自然環境を考える機会です。

生物学者レイチェル・カーソンは著書の中で「自然とのつながりは孤独や退屈を癒す、創造力や想像力を刺激する、環境意識や責任感を高める」と。「センス・オブ・ワンダー(神秘や不思議さに目を見張る感性)」を子どもたちと共に大人も一緒に自然の中で感じながら次世代に繋ぐ「小さな感性の種子」を育み、これらの活動が子どもたちの過ごせる身近で豊かな自然環境の実現につながることを願っています。

## 新しい森の活動が始まりました オリポスの山の会の活動紹介

オリポスの山の会代表 久保 國雄

オリポスの山の会は2023年4月から松戸新田の「オリポスの山」で里やまボランティアの活動を開始しました。会のメンバーは里やまボランティア入門講座18～20期のメンバーが中心です。

「オリポスの山」は、2021年から活動を始めた入門講座17期「いいなの会」が活動する「大作の森」の北側に近接している森です。面積2haと松戸市に残された森の中でも大きな森の1つです。

近隣町会の方のお話では、住宅が建ち始めた40年前頃、スギなどの針葉樹が多い森だったそうですが、時を経て植生が大きく変わり、現在ではイヌシデ、コナラ、クヌギなどの広葉樹の大木が目立ちます。

近年松戸市でも被害が広がってきたナラ枯れは大径木の多いこの森でも猛威を振るい、松戸市のナラ枯れ対策事業により今年の3月に23本の被害木を伐倒していますが、まだ20本弱の被害木が残っており今後も処理が必要です。

この森はボーイスカウト松戸第9団が約40年前から活動地・キャンプ地として利用してきました。また、コロナ禍以前は、近くの小学校の自然観察の場、町内会のバーベキュー等のイベントの会場、テレビのロケ地としても利用されてきたそうです。

「オリポスの山」という呼び名は、最初のボーイスカウト隊が出来た時の子供達の人数が12名であり、ギリシャ神話のオリポス山に住まう12神になぞらえて野営場をオリポスの山と命名したそうです。



この森は市街化区域の中にあり、森の周囲が住宅や学校に接しています。ボーイスカウトの皆さんの長年の活動によって中央通路や広場などの整備がされました。しかしながら、周辺部の茂みにより周囲の道路から森の中が見通せず、防犯上不安を感じる人もいます。そのこともあってか、「オリポスの山」と「大作の森」の間の道路は小学校の通学路から除外されているそうです。

住民の皆さんに受け入れられる森を目指して、周辺部の茂みなどの整理をしながらも、森の景観や生態系にも配慮した整備が大切になると感じています。

「この森で何をしたいか」ということについてはまだ具体的な方針はありません。活動開始時の応援団スタートアップ研修で、里やまボランティアの大先輩から、「最初の一年はあまり森をいじらず、じっくり森を観察して、森をよく知ってください」という助言をいただきました。現在は、周辺部の整備をしながら森になじみつつ、メンバーそれぞれがこの森がどのような森になるとよいか考えている最中です。来年くらいから具体的な方向性を話し合おうということにしています。

広い森です。森の中で木々の間から青空を見上げ、小鳥のさえずりを聞くと自然にすっぽり囲まれているように感じ、安らぎと覚え、心が優しくなる気がします。そんな環境を保てるように活動を続けていきたいと思っています。



みどりの拠点・金ケ作の可能性を意見交換

## 第2回 松戸みどりのフォーラム 金ケ作育苗圃で開催

松戸市緑推進委員 高橋 盛男

「松戸みどりのフォーラム」は、松戸のみどりや活動に「見て、触れて、語り合う」交流会。第2回を本年11月19日(日)、松戸市金ケ作育苗圃で開催しました。

### 「金ケ作のみどりとまちをつなごう」

「松戸みどりのフォーラム」は、松戸市緑推進委員会の企画、松戸市との共催で2019年6月29日に第1回が開催されました。「松戸のみどりの基本計画」の策定にともなう調査・研究の一環として、市内のみどり関係の活動に取り組む団体の集いとして催されました。

みどりの基本計画の策定後に企画された今回の「みどりフォーラム」は、みどり関係団体を対象とした前回とは異なり、一般市民のみどり以外の活動に関わる方々を対象としました。緑推進委員会の作業部会であるみどりのサロン部会の検討テーマのひとつが「みどりとまちをつなぐ」機会づくりであるからです。

会場の選定については、金ケ作地区が市内でも緑地の集積度が高い地域であること、同地区において現在、市の委託により千葉大学の柳井、木下、岩崎研究室が金ケ作育苗圃のリニューアルプロジェクトを展開していることが背景にあります。そして、一般の方々も立ち寄りやすいように、囲いやまの森で毎年開催され、たくさんの親子が参加する「あそびの森in囲いやま」と同日開催としました(1面参照)。

### 関係団体の協力で育苗圃にぎわい

会場では、展示パネルのみどりの活動を紹介するほか、育苗圃内で活動する「松戸花壇づくりネットワーク」による輪投げ、「ハーブボランティア」によるハーブティーの提供、みどりと花の課職員による植木鉢の絵付けとなぞときクвестなどのアトラクションも用意しました。これらは「あそびの森」から立ち寄った親子に好評で、予想外のにぎわいを見せました。

一方、今回の大きな成果は、並行して開催した「金ケ作のみどり再発見ツアー&ミニワークショップ(以下、ツアー&ミニWS)」にあったと思います。



金ケ作のみどり再発見ツアーで育苗圃に到着

### うれしや、予定外の意見交換会に発展

熊野神社や金ケ作自然公園など金ケ作地区の主要な緑地をめぐるこの「ツアー&ミニWS」は、招待者を対象としました。主だったゲストは地域の郷土史研究家や森林研究者、木工アーティスト、まちづくりコーディネーターなどです。直接には緑地の保全と関わっていないけれど、ふだんアクティブに活動している方々が、金ケ作地区の緑と育苗圃をどうとらえ、そこから何を感じ取ってくれるだろう。それを知ることがこの「ツアー&ミニWS」のねらいです。

さらに、このツアーには千葉大学大学院の演習にも加えられ、修士課程の学生20人と先生も参加。総勢30人を超える大ツアーになりました。ガイドを務めたのは緑ネットのメンバー。少し大変でしたけれど、いつもの再発見ツアーとは違った発見もありました。

ゲストも学生たちも、金ケ作地区のみどりの豊かさに驚いた様子です。「じっくり歩いたのは初めて」「解説付きで、歴史と緑のつながりがよくわかった」「みどりを軸にしたさまざまな可能性がありそう」など、ゲストの反応もとても良い内容でした。

コースを歩いて育苗圃に着き、簡単なアンケートをもとにしたWSを終えたあとも、ほとんどのゲストが残り、予定外の意見交換会に発展。示唆に富む多くの意見をいただきました。この成果を今後、どう生かすかが課題。意見交換会で出されたコメント等も併せ、それらについては改めてご報告いたします。

## 森で楽しむ音楽会 in 囲いやまの森 17年目の秋の森

10月28日(土) 囲いやまの森で音楽会が開かれました。コロナ禍で出せなかった歌声を抑え気味に響かせて、鑑賞しました。



## 竹ブンブンコマ、竹カエルペンダント、 シュロキンギョ、竹打楽器 モリヒロフェスタで森の遊びを紹介

11月5日(日) 21世紀の森と広場で開催されたモリヒロフェスタに里やま応援団が出演。竹ブンブンコマ、竹カエルペンダント、シュロの葉キンギョを子どもたちが作り、そのにぎやかさを通りがかりの親子が足を止めて、参加する光景が目立ちました。



## ～しぜんのコラム 56～

### 蟹の爪

森の維持管理作業によって出た剪定枝のこと。以前は燃料にしていたが、諸般の事情で燃やせなくなり、野積みになっていた。最後は土に帰るが、時間がかかる。置いたスペースが増えて困っていた。

救世主は、松戸みどりと花の基金が所有するチップパー(粉碎機)。2021年から使わせていただき、粉碎したチップは散策路にまいたり、梅林にまいて土壌改良に使っている。チップの一部は、まかずにそのまま野積みをしているが、そこに面白いキノコが生えた。“カニノツメ”である。



カニノツメ 2023.10.23 関さんの森

“カニノツメ”の名前の由来は、もうおわかりですね。食べられるか否かが気になるが、食には適さない。毒は無いが、美味しくはない。というか臭い。子実体の上の方に、黒っぽいものが付いているが、これは“グレバ”とよばれ、胞子を含んでいる。新鮮なグレバは、ドロツとしていて、ウンチのように臭い。

多くのキノコは、風で胞子を飛ばすが、カニノツメなどの腹菌類の一部は、胞子をグレバに含ませ、悪臭でハエなどを呼びよせる。そしてハエにからだに胞子を付着させ、拡散させるのである。

(山田純稔)

## ★松戸のみどり再発見ツアー (観察学習会No.64)

### 「松戸のみどり再発見・湧水めぐりと初詣」

緑のネットワーク・まつどが主催する松戸のみどり再発見ツアーは、みどりの新たな魅力を発見する試みです。北総台地の縁だからこそみられる湧水と社寺をめぐるコースを歩き、身近なみどりについて考えます。

**1月9日(火) 9:30～12:30 (雨天中止) 参加費300円 (会員は100円)**

**集合** 新京成線上本郷駅改札口 9:30 **持ち物** 飲み物、帽子、マスクは自由

**申込み・問合せ:** 090-4078-3703 (藤田 1月3日から受付開始 18時以降) ※申込制・先着30名

**その他** 歩きやすい服装でどうぞ **歩く行程** 約2.5km